

「CS と予告先発がプロ野球の観客数に与える影響」  
Effect of Climax Series and starter pre-announcement in NPB,  
～focusing on number of spectators.

1K08B149-8 西本 浄

指導教員 主査 武藤泰明 先生 副査 葛西順一 先生

1. 「序論」

2011 年秋、プロ野球界に衝撃が走った。横浜ベイスターズが身売りすることになったのだ。チームは 1998 年に優勝して以来、最下位 7 度と低迷が続いている。特にセ・リーグで 2007 年に CS 制度が導入されて以降も優勝争いどころか 3 位争いにすら加わることなくシーズン中盤には最下位を独走するケースが多い。

2011 年の横浜ベイスターズのホーム観客動員数は 12 球団でワーストである。それを踏まえて今回筆者はプロ野球で現行行われているルール・制度等が観客動員にどのような影響を与えているのかについて調査、考察を行う。

2. 「セパ両リーグ全体の集客力」

2007 年から 2011 年にかけてプロ野球の観客動員数をみるとセ・リーグは下降気味でありパ・リーグは上昇傾向にある。パ・リーグは日本を代表するエース級投手が多く在籍することもあってか観客動員数を年々伸ばしてきている。

両リーグのフランチャイズをみると、セ・リーグは首都圏に集中して顧客の奪い合い状態であるが、パ・リーグは北海道の日本ハム、宮城の楽天に見られるように市場のすみわけがうまくいっている。

3. 「CS 制度が観客動員に与える効果について」

CS 制度は 2007 年からセパ両リーグで始まった。ペナントレース終了後に各リーグで 3 位以内に入ったチーム同士で日本シリーズ進出をかけて、短期決戦を行うのである。ペナントレース終盤まで日本一の可能性が残ることでリーグ全体を盛り上げる効果があり、消化試合が減ると言われている。しかし、3 位までに日本一になれる可能性があるということは反面、ペナントレースを制しても日本シリーズに出られない可能性があるのだ。144 試合という長丁場を戦い抜いて勝ち取ったものを、たったの数試合で覆されてしまうという現実が存在する。「ペナントレース優勝」の価値が下がってしまうという批判的意見は未だに根強い。終盤の盛り上がり優勝の価値低下の恐れという両面を抱えたまま現在日本プロ野球は行われているのである。今回 2007 年から 2011 年に

かけて CS 進出を争った 1 位から 4 位のチームの観客動員数について両リーグの 5 年分、合計 40 チームの CS 進出が決まる、もしくは進出の望みが断たれる直前の 5 試合を検証した。それによって 40 チーム中 33 チームは年間平均観客動員数を上回っていたことが判明した。その中で平均を下回った 7 チームについては他チームとのゲーム差が大きいチームが多かった。つまりいかに激しい順位争いを繰り広げるかが観客動員数に影響していることがわかった。

4. 「パ・リーグの先発投手予告制度が観客動員に与える影響」

パ・リーグの予告先発制度がどのように観客動員数に作用しているかを 2011 年のデータを参考にして、各先発投手別に検証を行なった。

本拠地で 8 試合以上先発登板した投手の中で、チーム平均に対して一番観客動員数の多かった投手を調査したところ 1 位が楽天の田中将大投手、2 位が日本ハムの斎藤佑樹投手という結果となった。さらに単純な観客動員数で言うと 1 位は斎藤佑樹投手となった。この結果から予告先発制度が観客動員数に大きな影響を与えていることがわかった。

5. 「結論」

観客数が減少傾向のセ・リーグは首都圏にチームが集中していることが顧客の奪い合いにつながってしまっている。遅かれ早かれ改革が必要である。研究の結果より CS 制度の観客動員へのプラスの効果ははっきりと出た。しかし各チームの順位推移によって必ずしもこの効果を得られるわけではない。

また、パ・リーグの予告先発制度が観客動員に影響を及ぼしていることが斎藤佑樹投手、田中将大投手の例からわかった。それでも他のエース級投手の例から、そのシーズンの成績や投げる曜日によって変動しやすい。斎藤投手においても今後希少性が下がって観客を呼べなくなる可能性も考えられるため今後も調査を続けていく必要がある。